

第76回山口西田讀書會（2015年5月30日）

前回（75回、2015年5月16日実施分）のprotocols

出席者（敬称略）：佐野、来栖、奈原、藤村、杉山、萬納寺、尾崎、桑原、岡部（9人）

【常栄寺坐禅会の報告】

5月23日に常栄寺であった坐禅会に山口西田讀書會から8人（僧堂6人、本堂2人）が参加した。この日の催しに関して次の2点を特筆する。

提唱に代えて明治政府の命令で解散の憂き目にあった普化宗（ふけしゅう）=虚無僧に伝わる尺八の楽曲「開経偈（かいきょうげ）」「虚鈴（きょれい）」の2曲が今井老师みずからの演奏で紹介された。「虚鈴（きょれい）」は「音のよって伝えられる真理」とされる珍しい楽曲である。また、普化宗の尺八は、民謡となり、首を降らないクサビ奏法であることに特徴があるとの説明があった。

午後の講義では茶の湯にまつわる禅語の紹介があり、講師からは「即ち知る者は言わず、言う者は知らず」（荘子）、不立文字などの言葉が次々に飛びだし、言語をたのむ哲学に多くの警策をいただいた。

●第一部 プロトコル報告（来栖）

対話の報告に関する部分は指摘なし。

【哲学的問い】（第2編第1章「考究の出立点」第2段落）

物心の独立的存在を認める立場への観念論からの反駁は、物心の独立的存在が前提されている点で十分ではないか。純粹経験は物心の独立的存在を否定するかたちでしか成立できない。ひいては見神=純粹経験の統一が、主客未分の根本であるとしてどうして言えるのか。

【佐野先生のまとめ】

純粹経験という直接的な経験をともに、そこから判断が起こる。判断が起こったところで自我がでてくる。自我と同時に客体、客観がでてくる。判断することによって主観、客観が分かれる。判断するなかで客体を統一しようとするところから、そのはたらきが自覚され、自己という感覚が起こってくる。それが自覚につながる。また十分に訓練されていくことで純粹経験に戻る。

物があるというのは、そう考えたほうが生きるために整合的であるからであると理解する。物が認識を離れて存在すると考えた方が整合的であり、主観客観もおなじように、行為の基礎になる経験を整理してた結果であると説明する。

ただし、純粹経験から出発すること、すなわち「この経験が純粹経験であったとしてどうして言えるのか」という難点を抱えている。

[発言1] 人は先験（超越）的なものも含め、すべてを認識可能な状態にある、と西田は言っているのではないか。初生児であっても動物であっても、認識の前提に先験的なものがある。認識は先験的なものと、経験則の両方で成り立っていると理解している。人はすべて（言葉がなくても）先験的な認識する力を持っている。

それは論理的な要請か。

純粹経験は無仮定なものであり、分別による論理、科学を捨象したものである。

経験則の認識があり、それと別に先験的な認識が不可欠であるなら、論理的な必然ではないか。

（ここで時間制限の2時40分が到来）

●第二部 第二編第 10 章「実在としての神」第 1 段落注の途中からを読む

【§ 2-10-1 註】しかし今日の極端なる科学者の様に——以降を読む
「実在の根柢には精神的原理があって、この原理が即ち神である。」

宇宙の統一と調和を認めるとき、それが「神」と呼ばれるとの西田の立場を確認した。

[発言 1] 宇宙は混沌ではないのか。

[発言 2] 西田の宇宙のとらえかたは科学でいう宇宙論とはことなる全体の意味ではないか。

[発言 3] ハイゼンベルグ、アインシュタインの名前が登場

【§ 2-10-2】神の存在論証とそれらに対する西田の反論

『善の研究』では次の存在論証が紹介されており、西田が知らないはずのない神の存在論的証明（オントロジーチャー・デヴァイス）には、ここでは一切の言及がない。

- ・因果律による証明（原因と結果がある⇔神の存在の原因はなにか）
- ・目的論的証明／自然神学的証明（世界には意味がある⇔万物が合目的であることは証明困難）
- ・道徳論的証明（全知全能の神が道徳を維持⇔そうでなければならない証明ではない）

西田は『倫理学草案 II』において、神の存在論的証明を「もっとも深遠で唯一の方法」であると述べていることから、ここでは意図的に除外したことが推察される。

[発言 1] 西田のいう「統一」としての神は、存在論的というより目的論あるいは道徳論的ではないか。

[発言 2] 統一力はあるが、目的があるわけではない。

生き物のしくみは合理的、合目的とはいえないか。

生存の目的であっても、世界の目的ではない。

[発言 3] 統一力のある混沌というのはあるのか（混沌はエントロピーの増大、無秩序の拡大を意味）。

[発言 4] 外側からいくら神を証明してもしかたないと西田は言っているのではないか。

直接経験から神の存在を導くしかないと言いたいのだろうか。

【§ 2-10-3】第 3 段落を読む

[発言 1] 無限の力とは具体的になにか。

[発言 2] 時間的、空間的に限られた個人でも、純粹経験によって根本を知る得る。

[倫理学草案] 神を内面的経験の上にこれを直覚し、自己の無力を感じる時、自己はこの絶対無限の中に包容され、ただちに神の存在を確信する＝見神の事実。論理的推論による神の存在証明はどこまでも仮定にすぎない。見神の人には知識的証明は無用である。音楽の美は知識と没交渉なるがごとし。宗教的直観と知識は衝突しない。衝突するのは誤った宗教である。

【§ 2-10-4】第 4 段落を読む

[発言 1] あるときは無といい、あるときは理と知っているが。

無＝理＝統一力＝神である。

【§2-10-4 註記】第4段落の註記を読む

「眼を具えねばならぬ」との命令口調になっている。ここで佐野先生から再度『倫理学草案』の紹介があり、そこでの西田は「吾人が無限なる実在の大勢力に対し、自己の無力を感じるとき、自己は絶対無限の中に――」のように、かなり論調がちがっていることが指摘された。

[発言1] 徹底して「平凡にして浅薄なる人間」ならば、修練した人に劣らぬ眼を具えることがある。

[発言2] 否定神学のクザヌスより「知ある無知」、快樂追及型のマルキ・ド・サドなどとの関係にも言及があった（対話は深まらなかった）。

【§2-10-5】第5段落を読む

人の欲望は、比較級として「より一層」大なる統一を求めるが、その統一活動の根本としての「宇宙の統一なる神」に至っては最大、最深に達している意味であることを確認した。

[発言1] 第5段落末尾の「神は無限の愛、無限の喜び、平安である」との規定は目的論的、あるいは道徳論的ではないか。

有限のなかでの最高の愛ではない「無限の愛」であることが重要ではないか。

●哲学的問い

§2-10-3にあるペーメの「翻されたる眼 (umgewandtes Auge)」への言及。また岩波文庫2012年改訂版の「注釈」にある西田の「無顕現の神」「無であると共に凡て」「無目的の意志」をふまえて、西田が§2-10-5で述べている「実在統一の根本」の「根本」は、なぜ推論ではなく直覚しなければならないのか。

もっとも根本的であるなら、もっともありふれているはずであり機会は無限にある。無意識にそれを見聞きしている可能性があるにもかかわらず、直接に経験することが必要なのはなぜか。直接の経験はどのような効果を生じると考えられているのか。

(筆記：岡部)